

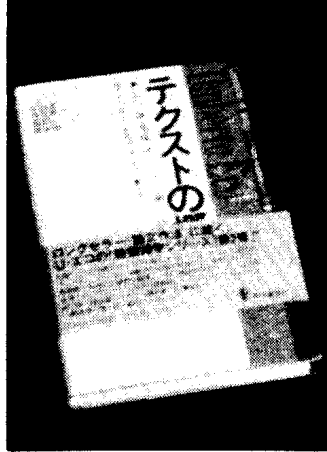
ウンベルト・エコ原著、谷口勇 訳

『テキストの概念』

——記号論・意味論・テキスト論への序説——

一九九三年三月二五日発行 而立書房

B6版 三三五頁



谷口氏は前任校以来、もっぱら翻訳一筋に業績を重ねてきたが、ここにまた『テキストの概念』の翻訳書を加えることとなった。まことにおめでたいことである。

この書物は決して読み易いものではない。原書はエコがサンパウロ大学で行った一連の講義のブラジル語版である。そしてそれを更に邦訳したものであることを考えて、意味の難解さ、また曖昧さは不可避と思われる。それが記号論に関する内容からして尚更のことと首肯される。この難解

な著作が谷口氏の手により邦訳されたことはまことによろこばしい限りである。

サンパウロ大学のシドマル・テオドーロ・パイスが序で述べているように、『テキストの概念』はウンベルト・エコが一九七九年後半期にサンパウロ大学イタリア語・イタリア文学大学院コースで行った一連の講義である。これらは、記号、記号の機能、意味部門の構造、意味素分析、成分分析のモデル、意味論的百科事典の概念、無限の記号過程、形態意味素からテキストへの行程、テキスト内容の現動化、を論じ斬新な記号理論を提供しているのである。ポロニャ大学教授のほかに、アメリカ諸大学の客員教授を勤めユニークな著作を出しているウンベルト・エコは二十一年にわたり、あらゆる角度から見てユニークな記号理論を構築しつつある。



ウンベルト・エコ(一九三二-)については『開かれた

作品』(邦訳、青土社)や『記号論』(邦訳、岩波書店)、『論文作法』(邦訳、而立書房)、最近では『物語における読者』(邦訳、青土社)二つのベストセラー

小説『薔薇の名前』、『フーコーの振り子』によって漸く日本でも有名になりつつある。

谷口勇氏訳『テキストの概念』は『論文作法』と同じく「教養諸学シリーズ」第二、として計画され出版された。原著はブラジル語版しか出版されていない、極めて珍しいもので、訳者が現地で見つけたという。さきに述べた通り、エコが前記『記号論』と『物語における読者』を基礎にして、分かり易く講義した講義録である。さきにふれた所であるが、内容を要約すると、記号論、意味論、テキスト論となる。まず記号概念を洗い直し、欧米に影響の深い Ogden & Richards の考えや、Hjelmslev の考えについても、新しく検討し直してユニークなエコの説を打ち出している。そして、現代論理学の用語を用いて、新しい記号三角形を明示し、また、Hjelmslev の連続体(continuum)概念の練り直しにより、内容面／表現面を取り囲むものとして提示する、など、実に手際良い。

その他 Charles Sanders Peirce の Interpretant (解釈項)なる不分明な概念については、特に一章を設けている。エコによると、解釈項は「表現」に等しいという。また、Peirce の triad representamen (復 representamina、「代表項」)については、直接的対象 (immediate

diate object) についてわれわれが語るために構築するものだ、と説明している。いわゆる「記号」ないし「用語」というわけだ。もっとも、この representamen とっても、二つの問題を含むことも(五〇頁以下で)説明しており、たんなる解説だけに止まらないところが、エコのエコたるゆえんである。

Greimas の『構造意味論』(邦訳、紀伊国屋書店)や現代の様相論学から、「可能世界」の問題にも論を展開させていっている。歴史的には、最近新たに見直されつつある「ポリフェュリオリオスの樹木」を掘り起こし、さらにエコ独特の「意味論的百科事典」の概念を提唱する。ここでは特に Greimas の同位体(isotopy)概念の練り直しが行なわれている。その他 frame, topic, code / subcode といった概念を動員し、物語論を提唱すべく、フランスの A. Allais の二短篇を实地に、詳しく検討している。

エコ特有の難解さや不鮮明さもなくはないが、本書は「シリーズ」に含まれる予定の同じ訳者による『記号論入門』とともに、恰好の「エコ入門書」たることに変わりはない。広く読まれることが待たれる。これらは、エコの面白い小説の背骨を成しているものだからである。参考までに述べておくが、同じ訳者による二つの小説の「解明

シリーズ」が目下進行中であり、特に『バラの名前』解明シリーズではエコ自身の手になる『「バラの名前」覚書』が而立書房より近刊されることになっている。

なおこの書物は『図書新聞』、二二五四号（平、五、六、一九）に立川健二氏の書評が掲載された。「実験的な思考のプロセスそのものを展開、テキストとは不透明性をもった他者」として本書が紹介されている。立川氏は「テキストのメカニズムの解明が必要なのは、テキストが無限の解釈を許すわけではないからだ。△テキストは、多様で自由な読みに開かれている▽という考えが、たとえばロラン・バルトの名のもとに流布している。バルト自身がそう言ったかどうかは別にして、どんな解釈をするのも読者の自由だという考えは安易すぎるし、危険でもある。エコのことはを借りれば、△いくら解釈が無限だからといって、特定のテキストを、われわれの充ちや衝動のたわむれのための粹然たる口実にするには許されない▽のであり、△テキストに対して、われわれが言わせることのできるのは、テキストがわれわれに言うのを許容することだけである▽。つまりテキストとは、読み手の主観性に左右されない△不透明性▽をもった△他者▽だということである。」という。

（高田美一）
たかたみいち